



福山平成大学

FDニューズレター No.4



平成 20 年 9 月 25 日 発行
 福山平成大学
 FD 推進委員会
 FD ニューズレター
 編集部 編集

平成 19 年度後期・20 年度前期 学生への授業アンケート調査について

1. 調査概要

	平成 19 年度 後期	平成 20 年度 前期
実施期間	平成 20 年 1/21 ~ 1/30	平成 20 年 7/7 ~ 7/23
対象科目	演習・実習等の科目を除く、専任教員担当の 170 科目	専門・基礎演習（ゼミ）を除く、非常勤講師等の担当科目も含めた 304 科目
実施方法*	科目担当教員が、授業時間中にアンケート用紙の配布、回収を行う	左記に同じ
質問項目	下記の通り	左記に同じ
実施科目数（率）	147 科目（86.5%）	227 科目（74.7%）

*ただし、受講人数が 5 名未満の科目の実施については、担当者の任意

◆質問項目

平成 19 年度 後期	平成 20 年度 前期
Q1. シラバス（授業概要）は、この授業の履修の決定や学習に役立った	Q1. シラバス（授業概要）は、この授業の履修の決定や学習に役立った
	Q2. 受講にあたって、学習到達目標や注意事項などの説明・指導は、適切だった
Q2. この授業の進度は、適切だった	Q3. この授業の進度は、適切だった
Q3. 教員の話し方は、聞き取りやすかった	Q4. 教員の話し方は、聞き取りやすかった
Q4. 板書や視聴覚機器は、見やすかった（聞きやすかった）	Q5. 板書や視聴覚機器は、見やすかった（聞きやすかった）
Q5. 教員の説明は、わかりやすかった	Q6. 教員の説明・指導は、わかりやすかった
Q6. 教室の環境・設備などは、適切だった	Q7. 教室や実習・実技の環境・設備などは、適切だった
Q7. この授業は、有意義だった	Q8. この授業は、有意義だった
Q8. この授業にきちんと出席した	Q9. この授業にきちんと出席した
Q9. 受講マナー（遅刻・早退、私語など）は守れた	Q10. 受講マナー（遅刻・早退、私語など）は守れた
Q10. 予習・復習など、この授業に熱心に取り組んだ	Q11. 予習・復習・課題提出など、この授業に熱心に取り組んだ

《補足説明》

- 20 年度は新たに質問項目一つ（Q2）を追加するとともに、質問文の文言を若干変更
- 上記質問について、「5. よくあてはまる ~ 1. 全くあてはまらない」の 5 段階評価を、マークシート方式によって回答してもらう
- その他、担当者の自由設問及び、自由記述欄あり

2. 調査結果

《大学全体の結果》

◆平成 19 年度後期の回答総数と平均値

	5. よくあてはまる	4. ややあてはまる	3. どちらでもない	2. あまりあてはまらない	1. 全くあてはまらない	未回答	平均値
Q1	1152	1481	1768	359	224	7	3.60
Q2	1540	2029	1086	266	66	4	3.94
Q3	1787	1812	1011	291	81	9	3.99
Q4	1625	1663	1224	346	126	7	3.87
Q5	1676	1798	1103	308	104	2	3.93
Q6	1756	1900	1058	205	68	5	4.02
Q7	1656	1711	1214	271	115	24	3.91
Q8	2775	1348	642	175	36	15	4.34
Q9	2239	1542	895	252	47	16	4.14
Q10	761	1082	1806	809	507	26	3.16

◆平成 20 年度前期の回答数と平均値

	5. よくあてはまる	4. ややあてはまる	3. どちらでもない	2. あまりあてはまらない	1. 全くあてはまらない	未回答	平均値
Q1	2228	2114	2596	429	324	19	3.71
Q2	2578	2691	1942	308	172	19	3.94
Q3	2896	2583	1668	372	164	27	4.00
Q4	3046	2345	1554	494	248	23	3.97
Q5	2710	2254	1805	611	306	24	3.84
Q6	2889	2363	1715	474	239	30	3.94
Q7	2915	2536	1797	289	144	29	4.01
Q8	3004	2240	1750	406	257	53	3.96
Q9	4742	1758	906	211	50	43	4.43
Q10	4089	2099	1193	219	62	48	4.30
Q11	2668	1986	2198	473	332	53	3.81

《各学部の結果（平均値のみ）》

◆経営学部

	平成 19 年度後期		平成 20 年度前期
Q 1	3.83	Q 1	3.76
—	—	Q 2	4.03
Q 2	4.16	Q 3	4.06
Q 3	4.19	Q 4	4.08
Q 4	4.03	Q 5	3.98
Q 5	4.09	Q 6	4.03
Q 6	4.02	Q 7	4.08
Q 7	4.06	Q 8	4.06
Q 8	4.24	Q 9	4.26
Q 9	4.11	Q10	4.19
Q10	3.30	Q11	3.70

◆福祉健康学部

	平成 19 年度後期		平成 20 年度前期
Q 1	3.53	Q 1	3.68
—	—	Q 2	3.91
Q 2	3.88	Q 3	3.98
Q 3	3.94	Q 4	3.96
Q 4	3.82	Q 5	3.81
Q 5	3.88	Q 6	3.92
Q 6	4.00	Q 7	3.99
Q 7	3.84	Q 8	3.91
Q 8	4.32	Q 9	4.43
Q 9	4.12	Q10	4.31
Q10	3.09	Q11	3.82

◆看護学部

	平成 19 年度後期		平成 20 年度前期
Q 1	3.57	Q 1	3.75
—	—	Q 2	3.93
Q 2	3.96	Q 3	4.02
Q 3	3.96	Q 4	3.92
Q 4	3.88	Q 5	3.81
Q 5	3.96	Q 6	3.91
Q 6	4.13	Q 7	4.04
Q 7	4.07	Q 8	4.00
Q 8	4.61	Q 9	4.57
Q 9	4.35	Q10	4.35
Q10	3.31	Q11	3.87

3. 寸評

FD推進委員会による「学生への授業アンケート」が、平成 19 年度後期よりスタートした。初年度は、実技や実習、専門演習を除く専任教員が担当する科目についての実施であったが、20 年度は、非常勤講師等の科目も含め、いわゆるゼミ以外の全科目に対して実施を試みた。

両年度とも実施率、及び結果についてまずまずの数値が示されているが、重要なことは、いかに授業改善にアンケート調査を活用するかである。今後も継続的に調査を実施するとともに、より意義ある調査となるよう、委員会としても検討を重ねていきたい。(委員長 三好 宏)

いくつかの工夫

福祉健康学部 大中 章

合同授業

福祉学科社会福祉学専攻で行っている『基礎演習』は、原則的には、少人数クラス制を取りながら、その中に、クラス全体が集まって行う「合同授業」という形態も取り入れている。そこには、学生はもちろん、担当教員全員が出席することになる。合同授業の主担当者が行う授業を、その他の担当教員全員が体験することになるわけである。

授業改善には、授業を他の教員に公開し、意見交換することが役に立つ。ただ、授業公開には、恥ずかしさや不安がともなうものである。それはあたかも、公衆の面前で裸になるような感覚であり、授業改善の意欲はあっても、授業公開を実行に移すことは難しいことも多い。しかし、その場が公衆浴場なら、人前で裸になることも自然である。誰もが裸になるわけだから、その分、恥ずかしさや不安は和らぐ。その点、複数の教員が同時に参加することが前提となっている合同授業は、公衆浴場と同じように、授業公開にともなう恥ずかしさや不安を和らげる効果があると思われる。



「違い」を問う

その合同授業のひとつとして、わたしが担当したのが、『安全感を感じてもらうための座り方——意味を考える——』という授業である。「意味を考える」をテーマとしたので、「何のために？ なぜ？」のような座り方をするのか？ と問いかけ、学生に考えてもらう、ということにした。今回、工夫したのは、さらに、一般的な座り方と専門的な座り方を、実際にして見せ、それらの「違い」を問いかけることによって、考えるべきポイントも、考えてもらうことにした点にある。

「考える」とは、「問い」に「答える」ことである。大学は、高等学校までと違い、学問の場であり、自ら「問い」学ぶことが必要である。しかし、特に1年次生は、自ら問うことは難しい。その難しさは、「何のために？ なぜ？」と問うことだけでなく、どのことについて、問えばいいのかが分からない、という点にもあると思われる。疑問は、既存の知識では理解できない現象に気づいたときに生じるものである。そのような現象に気づくには、現状をよく観察し、理解できるかどうかを確かめ続ける態度が必要である。この点、一般的な座り方と専門的な座り方の違いを問いかけ、観察させ意識させたのは、既存の知識では理解できないこと、つまり問うべきことは何か、ということから考えさせた、という点で、意味があると思われる。

『授業に関するアンケート』

わたしは、この『基礎演習』に限らず、ほとんどの科目で、授業内容に関する「質問・意見、要望、感想」を求める『授業に関するアンケート』を、毎回の授業で、実施している。出された質問には、その全てに応え、出された要望には、可能な限り応えることにしている。回答は、次の授業で口頭で行うこともあるが、質問・意見、要望が多い場合は、回答を文書にして配布している。

授業は、学生のためにならなければ意味がない。学生のためになる授業にするには、学生のニーズをくみ取り、ニーズに応える必要がある。ニーズをくみ取る方法には、いくつかあると思われるが、率直に尋ねる、という方法が簡単である。学生から出された「質問・意見、要望、感想」を読むと、学生が理解しにくかった点や、誤解している点などが分かる。また、板書の書き方や声の大きさなど、授業方法に対する要望からも、学べる点が多いと感じる。

学生による授業評価アンケートには、期末に、当該科目のすべての授業について評価を求める、という形態がある。しかし、これでは、その科目の授業が終わった時点で行われるため、評価をしてもらった学生には、改善のメリットを直接、還元できない。授業は、目の前の受講生に役立ってはじめて意味があると思う。その点で、毎回、「質問・意見、要望、感想」を求め、毎回、それらに応え、修正・改善を積み重ねていくことは、重要だと思われる。

導入教育における学習意欲を高める授業づくり

福祉健康学部 八田 和子

福祉学科における導入教育の試み

福祉学科では、導入教育における一つの試みとして、基礎演習の一部に合同授業を導入しています。合同授業では、全教員が参加してクラス別に討論や作業をサポートしているので、きめ細かな対応が可能です。また全体で意見交換の場を設けることで、学生相互の刺激にもなっています。

授業の展開

大中先生の授業は、非言語コミュニケーションに焦点をあて、「一般的な座り方」と「安全感を感じてもらふ座り方」の違いを考える中で、対人援助における行動の意味を理解させるものでした。まず目的と要点を説明した上で、「座り方」のデモンストレーションを2パターン行い、次に両者の違いを見つける作業に入ります。このとき全員が作業に取り組めるように、個人で考える作業をしたあとグループ討論を行い、最後に全体で交流しました。



板書は簡潔にまとめられて見やすく、話し方もゆっくりと丁寧に聞き取りやすいものでした。

参加型の授業づくり

座り方の違いはわずかなもので、1回見ただけではなかなか違いを見つけることができません。「一体何だろう？」と言いながら学生たちは知らず知らずのうちに授業に引き込まれていきました。そして2、3回繰り返されると、「あっ、そうか」と目を輝かせながら違いを指摘し出しました。デモンストレーションを通じて自ら考える機会が与えられているため、学生が主体的に授業に参加する様子が見えましました。

中には適切な答えが思いつかなかったのか、冗談を交えて答える学生もいました。しかし大中先生はそれを上手に受けとめた上で、さらに考えるよう言葉をかけられました。教室は笑いにつつまれ、楽しい雰囲気となりました。授業中に学生に発言を求めても、「わかりません」の一言ですまされてしまうことが多いのですが、どのような答えも受けとめられるという雰囲気をつくるのが、参加型の授業の第一歩だと気付かされました。

生きた学び

学生の感想文を見ると、「援助する側が少し意図的に行動することで安全感を感じてもらえることがわかったので、ボランティアなどの場で活用していきたい」、「パーソナルスペースというちょっと専門的なことをならって、0.5 歩くらいソーシャルワーカーに近づいた気がした」などの記述がありました。今回の授業で取り上げられた、「座る」という日常的な行為は、それだけでは何の興味・関心も喚起しません。しかし、対人援助の視点でその行為を見つめ直したとき、様々なことが可視化され、生きた学びとして新鮮に受けとめられるのだと思います。

導入教育では、学生に学ぶ楽しさを体感させ、いかに学習意欲を高めるかということが課題の一つになると思います。今回の授業に参加させていただき、学生が「もっと学びたい、実践してみたい」という気持ちになるヒントを得ることができました。

ノートが変われば授業が変わる？

福祉健康学部 芝崎 良典

授業での留意点

学習の主体は学生であり、講師は単にその補助者に過ぎない。しかしながら、過去の自身の行った授業を振り返ってみれば、学生はおしなべて受動的であり、その前で講師は空しく空回りをし続ける。無力感を覚える一方で、しかしこの問題には解決方法があるのではないかとも思う。学生が受動的であると書いたが、学生が受動的なのではなく、学生を受動的にさせている何かがあるのではないか。その何かを取り除けば学生はもっと主体的に授業に参加し、知識の定着率も向上するのではないか。そこで、平成19年度はその「何か」として学生のノートをとる習慣を取り上げ、これを改善することを目的とした。具体的には Walter Pauk の Cornell ノートテイキングシステム (The Cornell Note-taking System¹) の導入及び授業資料をインターネットで配布することである。以下、これらを試みた理由、概要、結果を報告する。

1. ノートテイキングシステムの導入

本来学生は講師の話に意識を向けるべきである。スクリーンや黒板の情報というのは講師の話を補助する道具に過ぎない。しかし、実際のところ学生の意識は講師の話に向いているのではなく、スクリーンに向けられている。あまりにスクリーンのとおりノートを取ることに注意が向き過ぎている。人間は一度に別のことを同時に行うことが苦手であるから、書き写している間はものをうまく考えることができない。

学生が考えながら授業を受けるようするためには、この学生のノートをとる習慣を変えなければならない。コピー機のようにノートづくりをする時間は無駄である。授業中は要点だけメモし、講師の話を聞き理解する時間を十分に確保する必要がある。そこで、平成19年度は Cornell 大学のノートテイキングシステムを第一回目の授業で説明し、この方法を用い授業を受けるよう伝えた。この方法は授業中の手の動きは略号などを用いたメモにとどめ、代わりに講師の話に注意を十分に向けることを求めるものである。授業後、メモや記憶を頼りに完全なノートづくりを行うというものである。

2. 資料の配布

学生は強迫的とも思えるほどスクリーンの情報を写すのにこだわる。上のノートのとり方を勧めても、メモだけでは不安になるものもいるであろう。そこで、授業でスクリーンに投影した情報²をインターネット上に公開することにした。なお実際に利用されているかどうか確認するため、アクセス解析を行っている。

結果

自身の担当する授業では全て第一回目に上述のノートの取り方について説明を行い、これを用いることを勧めた。結果、極めて残念なことではあるが実際に一年間上記の方法でノートを取った学生は全学で A 君1名のみであった。資料の利用については、アクセス解析からは定期試験直前以外は利用されていないことが分かった。

学生はスクリーンに映った情報を全て書き写さないと納得できないようである。試みとしては完全に失敗であった。しかしながら、唯一この方法を継続した A 君は受講生のうちで最も定期試験の得点が高く、さらに彼には授業の合間に附属図書館にて授業に関連する書籍を参考にしながらノート作りに励んだり、積極的に不明点を講師に質問するなど主体的な学びが実現されている印象をもった。全体としては、本年度の試みは失敗というほかない。しかし、一事例ではあるが A 君のような事例もあることから、実際に広く用いられさえすればその効果は高いと思われる。平成20年度以降もこの試みを継続していく。



¹ この方法の概要は http://www.clt.cornell.edu/campus/learn/LSC_Resources/cornellsystem.pdf に詳しい。

² 実際の資料は <http://www13.ocn.ne.jp/~yshiba/> で見ることができる。

バラエティに富んだ学習スタイル

福祉健康学部 永井 純子

研究授業

日 時：平成 20 年 1 月 30 日（水）5 限（16：15～17：45）
 授業者：福祉健康学部こども学科 芝崎良典
 科目名：保育内容Ⅳ（人間関係）
 教 室：4103 号室



授業概要

今回、保育内容Ⅳ（人間関係）の授業を参観させていただきました。この授業は幼稚園教諭、保育士資格必修科目となっており、主に保育士取得希望の 2 年生が受講していました。

「理論と実習体験は別物ではない」という観点から、保育実習報告書を資料として、乳幼児期における自我の発達について授業が展開されました。周到に準備されたパワーポイントを使っての授業は、テーマ、課題、発問、要点等がわかりやすいだけでなく、回答欄を空欄にして、学生たちが自分の考えを書き込めるなど、いろいろ工夫されている感じが感じられました。

具体的には学生の体験によって書かれた報告書を読ませて、ポイントとなる個所に下線を引かせ、乳幼児期における自我の発達の特徴となる箇所を、各年齢別に探し出すという方法を取られていました。何度も同じ行動を繰り返す「自我のない」1 歳児から、何事も自分でやろうとする「幼い自我が芽生える」2 歳児、言葉で表現することができ、自己主張を始める「第一反抗期」と呼ばれる 3 歳児、自己と他者を認知し、「聞き分けのできる」4 歳児など、学生達が目で見、肌で感じてきた体験を理論とうまく結び付けていかれました。プリントを読んだり、発問したり、授業者が学生を指名する場面が多く見られたのですが、予め、学生の氏名カードを作っておかれ、指名が同一者に集中しないように配慮されている点など、新鮮な印象を受けました。

学生たちの表情

授業は先生の穏やかな口調で始められ、5 時限目という設定にもかかわらず、学生たちは静かに先生の話に耳を傾けていました。予め、要点がパワーポイントで示されており、黒板の字を書き写す必要がなく、より集中できるのかも知れないと感じました。また、読む、聞く、話す、見る、下線を引く、書き写す、考える、答える、解くなどバラエティに富んだ学習スタイルを次々と展開されるので、90 分の授業にあきることがなく、発言を求められても誰もがしっかりと回答する様子に感心いたしました。

参観者のコメント

今回、パワーポイントを使っての授業を参観させていただきましたが、その効果的な使用方法を学ばせて頂くとともに、授業準備にかかる時間および授業展開における工夫の重要性を改めて認識させていただきました。今回の授業内容は「自我の発達」と「均衡化理論」をキーワードとして行なわれましたが、学生にとって、均衡化理論など専門的な用語を理解することは大変困難であると感じ、いくつかのステップを踏まえて、実習体験と結びつけられたら良いのではないかと思いました。

このたびは大変貴重な機会を与えていただきまして、誠にありがとうございました。

《平成 19 年度》

平成 19 年	5 月 11 日	平成 19 年度 第 1 回委員会 議題 1) 平成 19 年度活動内容について 2) その他
	6 月 21 日	平成 19 年度 第 2 回委員会 議題 1) 平成 19 年度活動内容について 2) その他 2007 年度版 学生写真台帳 CD を全教員に配布 (貸与)
	10 月 11 日	平成 19 年度 第 3 回委員会 議題 1) 私の授業発表会について 2) 学生による授業アンケートについて 3) その他
	11 月 30 日	平成 19 年度 第 4 回委員会 議題 1) 学生による授業アンケートについて 2) その他
平成 20 年	1 月 21～30 日	学生への授業アンケート調査
	2 月 19 日	私の授業発表会 発表者 (1) 授業報告 大中 章 参観報告 八田 和子 (2) 授業報告 芝崎 良典 参観報告 永井 純子
	3 月 6～7 日	第 2 回 福山大学 F D 合宿研修 (於: 尾道ふれあいの里) 参加者 沖増 英治、三好 宏 (F D 推進委員)

《平成 20 年度》

平成 20 年	5 月 20 日	平成 20 年度 第 1 回委員会 議題 1) 平成 20 年度活動予定について 2) 前期授業アンケートについて 3) その他 2008 年版 学生写真台帳 CD を全教員に配布 (貸与)
	7 月 7～23 日	学生への授業アンケート調査
	8 月 1～2 日	F D 研修会 「統計講座」 担当: 福井正康 (経営学科)
	8 月 20～21 日	第 3 回 福山大学 F D 合宿研修 (於: 尾道ふれあいの里) 参加者 門田 清 (経営学科) 松本 智津 (看護学科) 大中 章、芝崎 良典 (F D 推進委員)

編集後記

F D ニュースレター No.4、昨年度発行予定が大幅に遅れましたことを、まずはお詫びいたします。授業発表に関われた先生には、早くから原稿を頂きながら、大変申し訳ございませんでした。今後は、研修会等活動状況に合わせて随時発行いたしますので、皆様のご協力のほどよろしくお願いいたします。

委員会が設立され 3 年目。ようやく活動も軌道に乗り始めた感があります。授業アンケート、授業発表会、F D 合宿研修など。全学的な F D 推進に向け、委員一同さらなる努力をいたす所存ですので、これまで以上のご支援をよろしくお願いいたします。(H. M)